

絶たれた幼い命

せっかく生まれてきたのに・・・

戦争と、飢えと病気と……。子どもたちの命を奪ったものは、ひとつではなかった。

若い母親が、必死で空襲の爆弾から乳児をかばった。そのとき乳児は、母の重みで窒息死。

また、満洲からの引き揚げ列車が、途中、爆撃を受けたとき、母親は幼子をおぶって無我夢中で逃げた。しかし、ロシア軍機が去ったとき、おぶっていた幼子は、すでに死んでいた。母親は、それでも列車中、医者を探して走り回った。



8月15日の子どもたち
あの日を記録する会 編
晶文社 発行



ある10歳の少年の引き揚げ記録
久木村 久 著
光人社 発行

「北朝鮮からの生還」の著者久木村 久氏は、咸興の収容所に入れられていたとき、2歳上の兄を亡くした。医者にも診てもらえず、看病してもらえず、あっけなく息をひきとったとある。

可哀そうな達兄、なんのための12年の人生だったのか。死んでどこに行ったのか。享年12歳、俗名平島達、戒名・釈蓮達、母と同様、朝鮮時代の遺品も、遺髪もなにもない。残ったのは思い出だけだ。

－本文より抜粋－

「南風の吹く日」 沖縄読谷村集団自決 下嶋 哲朗 著

長女義子（7か月）をしっかりと抱きかかえ、わきには長男義一（3歳）がしがみついている。

うちが何かにつまずいたひょうしに、義一は手をはなしてしまったよ……。義子はもうグッタリしていてね、だめかと思ったが、アメリカーがサトウキビの汁をしぼって、口の中にたらしたら、ゴクリと飲んで、息を吹き返したよ。うちは、義一をさがしにもどったけど、もう煙がひどくってよう……。うちが入って死んだら、義子をどうするかなと思うとよお、もう入っていけなかったんだよお……。 (途中略)

－本文より抜粋－



南風の吹く日
沖縄読谷村集団自決
下嶋哲朗 著
童心社 発行

若い母は、母カマー、養女タケ子（9歳）、長男義一の3人を失った。

母親は、必死で子どもを守ったが

終戦後、満州や朝鮮から死にも狂いで引き揚げてきた人々がいた。

「流れる星は生きている」の著者、**藤原てい氏**（作家新田次郎氏の妻であり、数学者藤原正彦氏の母である）は、作品の中で、1年以上にわたる地獄のような引き揚げの様子を記している。

7歳と5歳の子どもを連れたある母親は、生まれたばかりの赤ちゃんに飲ませるお乳が出なかった。……赤ちゃんは、風がやむように、朝起きてみると死んでいた。母親は、お墓に向かって「よし子、お母さんを許しておくれ。よし子、お母さんをかんにんしておくれ。」と……。悲痛な叫びであった。

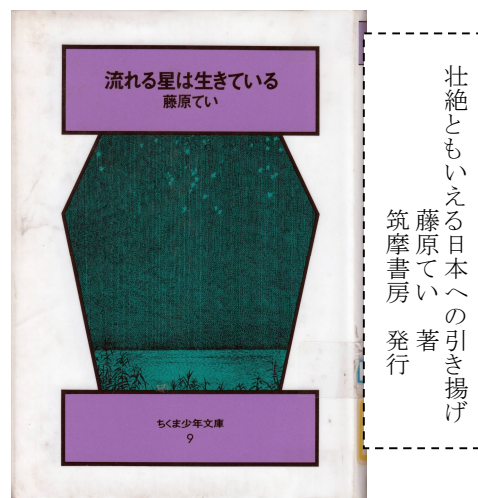
藤原氏は、3人の子どもたちを守るため、生きて帰るために、どんなみじめなことでもやった。食べるため、おむつを洗うため、病気を治すため、眠るため、先へ進むため、生きて日本へ、故郷へ帰るために。

生きて帰れた人は、運がよかった

餓死、自決、伝染病などで多くの死者を出した。

また、「中国残留日本人孤児」をつくったのも、この戦争であった。異国で、突然ひとりぼっちになってしまった日本人の子どもである。

逃げる途中、母親と離ればなれになってしまった子、母親が射殺され、母親の死体に重なり死んだふりをして助かった子、日本の軍人らしい人が、子どもたちを銃殺していたので、死んだふりをして助かった子……。こうした子どもたちも、戦争でその後の人生が、大きく変わってしまった。



こんな小さな子が妹をおぶって
飯山達雄 写真・文
草土文化 発行



40年前、中国人に買われてしま
った妹を、探し出すまでの軌跡
小中沢小夜子 著
金の星社 発行